PL
808
A3A17

Hagiwara, Sakutarō
Tsuki ni hoeru

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

月に吠える

詩集

詩集

月に吠える

萩原朔太郎著

北原白秋序

室生犀星跋

故田中恭吉插畫

恩地孝四郎插畫

發行

感情詩社・白日社

PL
808
A3A17

LIBRARY
SEP 29 1966
UNIVERSITY OF TORONTO

1128509

従兄　萩原榮次氏に捧ぐ

序

萩原君。

何と云つても私は君を愛する。さうして室生君を。それは何と云つても素直な優しい愛だ。いつまでもそれは永續するもので、いつでも同じ溫かさを保つてゆかれる愛だ。此の三人の生命を通じ、縱(よ)しそこにそれぞれ天稟の相違はあつても、何と云つてもおのづからひとつ流の交感がある。私は君達を思ふ時、いつでも同じ泉の底から更に新らしく湧き出してくる水の淸(すず)しさを感ずる。限りなき親し

さと驚きの眼を以て私は君達のよろこびとかなしみとを理會する。さうして以心傳心に同じ哀憐の情が三人の上に益々深められてゆくのを感ずる。それは互の胸の奥底に直接に互の手を觸れ得るたつた一つの尊いものである。

私は君をよく知つてゐる。さうして室生君を。さうして君達の詩とその詩の生ひたちとをよく知つてゐる。『朱欒』のむかしから親しく君達は私に君達の心を開いて呉れた。いい意味に於て其後もわれわれの心の交流は常住新鮮であつた。恐らく今後に於ても。それは廻り澄む三つの獨樂が今や將に相觸れむとする刹那の靜謐である。

そこには限の知られぬをののきがある。無論三つの生命は確實に三つの据りを保つてゐなければならぬ。然るのちにそれぞれ澄みきるのである。微妙な接吻がそののちに來る。同じ單純と誠實とを以て。而も互の動悸を聽きわけるほどの澄徹さを以て。幸に君達の生命も玲瓏乎としてゐる。

室生君と同じく君も亦生れた詩人の一人である事は誰も否むわけにはゆくまい。私は信ずる。さうして君の異常な神經と感情の所有

者である事も。譬へばそれは憂鬱な香水に深く涵した剃刀である。而もその豫覺は常に來る可き悲劇に向て顫へてゐる。然しそれは恐らく凶惡自身の爲に使用されると云ふよりも、凶惡に對する自衞、若くは自分自身に向けらるる懺悔の刄となる種類のものである。何故なれば、君の感情は恐怖の一刹那に於て、正しく君の肋骨の一本一本をも數へ得るほどの鋭さを持つてゐるからだ。

然しこの剃刀は幾分君の好奇な趣味性に匂づけられてゐる事もほんたうである。時には安らかにそれで以て君は君の薄い髯を當る。

淸純な凄さ、それは君の詩を讀むものの誰しも認め得る特色であ

らう。然しそれは室生君の云ふ通り、ポオやボオドレエルの凄さとは違ふ。君は寂しい、君は正直で、清楚で、透明で、もつと細かにぴちぴち動く。少くとも彼等の絶望的な暗さや頽廢した幻覺の魔睡は無い。宛然涼しい水銀の鏡に映る剃刀の閃めきである。その鏡に映るものは眞實である。そして其處には玻璃製の上品な市街や青空やが映る。さうして恐る可き殺人事件が突如として映つたり、素敵に氣の利いた探偵が走つたりする。

君の氣禀は又譬へば地面に直角に立つ一本の竹である。その細い幹は鮮かな青緑で、その葉は華奢でこまかに動く。たつた一本の竹、竹は天を直觀する。而も此竹の感想は凡てその根に沈潜して行くのである。根の根の細かな纖毛のその岐れの殆ど有るか無きかの毛の尖のイルミネエシヨン、それがセンチメンタリズムの極致とすれば、その毛の尖端にかぢりついて泣く男、それは病氣の朔太郎である。それは君も認めてゐる。

「詩は神秘でも象徴でも何でも無い。詩はただ病める魂の所有者と孤獨者との寂しい慰めである。」と君は云ふ。まことに君が一本の

竹は水面にうつる己が影を神秘とし象徴として不思議がる以前に、ほんたうの竹、ほんたうの自分自身を切に痛感するであらう。鮮純なリズムの歔欷(すすりなき)はそこから來(く)る。さうしてその葉その根の尖(さき)まで光り出す。

君の靈魂は私の知つてゐる限りまさしく蒼い顔をしてゐた。殆ど病み暮らしてばかりゐるやうに見えた。然しそれは眞珠貝の生身(なまみ)が一顆小砂に擦(す)られる痛さである。痛みが突きつめれば突きつめるほ

ど小砂は眞珠になる。それがほんたうの生身であり、生身から滴らす粘液がほんたうの苦しみからにじみ出たものである事は、君の詩が證明してゐる。

外面的に見た君も極めて痩せて尖つてゐる。さうしてその四肢が常に鋭角に動く、まさしく竹の感覺である。而も突如として電流體の感情が頭から足の爪先まで震はす時、君はぴよんぴよん跳ねる。さうでない時の君はいつも眼から涙がこぼれ落ちさうで、何かに縋りつきたい風である。

潔癖で我儘なお坊つちやんで（この點は私とよく似てゐる）その

瓣寂しがりの、いつも白い神經を露はに顫へさしてゐる人だ。それは電流の來ぬ前の電球の硝子の中の顫へてやまぬ竹の線である。

君の電流體の感情はあらゆる液體を固體に凝結せずんばやまない。竹の葉の水氣が集つて一滴の露となり、腐れた酒の蒸氣が冷たいランビキの玻璃に透明な酒精の雫を形づくる迄のそれ自身の洗練はかりそめのものではない。君のセンチメンタリズムの信條はまさしく木炭が金剛石になるまでの永い永い時の長さを、一瞬の間に縮める、この凝念の强さであらう。摩訶不思議なる此の眞言の秘密はただ詩人のみが知る。

月に吠える、それは正しく君の悲しい心である。冬になつて私のところの白い小犬もいよいよ吠える。晝のうちは空に一羽の雀が啼いても吠える。夜はなほさらきさらきさらと霜が下りる。霜の下りる聲まで嗅ぎ知つて吠える。天を仰ぎ、眞實に地面（ちべた）に生きてゐるものは悲しい。

びようびようと吠える。何かがびようびようと吠える。聽いてゐ

てさへも身の痺れるやうな寂しい遣瀬ない聲、その聲が今夜も向うの竹林を透してきこえる。降り注ぐものは新鮮な竹の葉の雪のごとく結晶し、君を思へば蒼白い月天がいつもその上にかかる。

萩原君。

何と云つても私は君を愛する。さうして室生君を。君は私より二つ年下で、室生君は君より又二つ年下である。私は私より少しでも年若く、私より更に新らしく生れて來た二つの相似た靈魂の爲めに

祝福し、更に甚深な肉親の交歡に醉ふ。

又更に君と室生君との藝術上の熱愛を思ふと涙が流れる。君の歡びは室生君の歡びである。さうして又私の歡びである。

この機會を利用して、私は更に君に讃嘆の辭を贈る。

大正六年一月十日

葛飾の紫烟草舍にて

北原白秋

序

詩の表現の目的は單に情調のための情調を表現することではない。幻覺のための幻覺を描くことでもない。同時にまたある種の思想を宣傳演釋することのためでもない。詩の本來の目的は寧ろそれらの者を通じて、人心の内部に顫動する所の感情そのものの本質を凝視し、かつ感情をさかんに流露させることである。

詩とは感情の神經を摑んだものである。生きて働く心理學である。

すべてのよい敍情詩には、理屈や言葉で説明することの出來ない一種の美感が伴ふ。これを詩のにほひといふ。（人によつては氣韻とか氣禀とかいふ）にほひは詩の主眼とする陶醉的氣分の要素である。順つてこのにほひの稀薄な詩は韻文としての價値のすくないものであつて、言はば香味を缺いた酒のやうなものである。かういふ酒を私は好まない。

詩の表現は素樸なれ、詩のにほひは芳純でありたい。

私の詩の讀者にのぞむ所は、詩の表面に表はれた概念や「ことが

ら」ではなくして、内部の核心である感情そのものに感觸してもらひたいことである。私の心の「かなしみ」「よろこび」「さびしみ」「おそれ」その他言葉や文章では言ひ現はしがたい複雜した特種の感情を、私は自分の詩のリズムによつて表現する。併しリズムは說明ではない。リズムは以心傳心である。そのリズムを無言で感知することの出來る人とのみ、私は手をとつて語り合ふことができる。

『どういふわけでうれしい？』といふ質問に對して人は容易にその理由を說明することができる。けれども『どういふ工合にうれしい』といふ問に對しては何人(ひと)もたやすくその心理を說明することは

出來ない。

思ふに人間の感情といふものは、極めて單純であつて、同時に極めて複雜したものである。極めて普遍性のものであつて、同時に極めて個性的な特異なものである。

どんな場合にも、人が自己の感情を完全に表現しやうと思つたら、それは容易のわざではない。この場合には言葉は何の役にもたたない。そこには音樂と詩があるばかりである。

私はときどき不幸な狂水病者のことを考へる。

あの病氣にかかつた人間は非常に水を恐れるといふことだ。コッ

プに盛つた一杯の水が絶息するほど恐ろしいといふやうなことは、どんなにしても我々には想像のおよばないことである。

『どういふわけで水が恐ろしい?』『どういふ工合に水が恐ろしい?』これらの心理は、我々にとつては只々不可思議千萬のものといふの外はない。けれどもあの患者にとつてはそれが何よりも眞實な事實なのである。そして此の場合に若しその患者自身が……何等かの必要に迫まられて……この苦しい實感を傍人に向つて説明しやうと試みるならば(それはずゐぶん有りそうに思はれることだ。もし傍人がこの病氣について特種の智識をもたなかつた場合には彼に對してどんな慘酷な惡戲が行はれないとも限らない。こんな場合を考

へると私は戰慄せずには居られない。）患者自身はどんな手段をとるべきであらう。恐らくはどのやうな言葉の説明を以てしても、この奇異な感情を表現することは出來ないであらう。けれども、若し彼に詩人としての才能があつたら、もちろん彼は詩を作るにちがひない。詩は人間の言葉で説明することの出來ないものまでも説明する。詩は言葉以上の言葉である。

狂水病者の例は極めて特異の例である。けれどもまた同時に極めてありふれた例でもある。

人間は一人一人にちがつた肉體と、ちがつた神經とをもつて居る。

我のかなしみは彼のかなしみではない。彼のよろこびは我のよろこびではない。
人は一人一人では、いつも永久に、永久に、恐ろしい孤獨である。
原始以來、神は幾億萬人といふ人間を造つた。けれども全く同じ顏の人間を、決して二人とは造りはしなかつた。人はだれでも單位で生れて、永久に單位で死ななければならない。
とはいへ、我々は決してぽつねんと切りはなされた宇宙の單位ではない。
我々の顏は、我々の皮膚は、一人一人にみんな異つて居る。けれども、實際は一人一人にみんな同一のところをもつて居るのである、

この共通を人間同志の間に發見するとき、人類間の『道德』と『愛』とが生れるのである。この共通を人類と植物との間に發見するとき、自然間の『道德』と『愛』とが生れるのである。そして我々はもはや永久に孤獨ではない。

私のこの肉體とこの感情とは、もちろん世界中で私一人しか所有して居ない。またそれを完全に理解してゐる人も私一人しかない。これは極めて極めて特異な性質をもつたものである。けれども、それはまた同時に、世界の何びとにも共通なものでなければならない。この特異にして共通なる個々の感情の焦點に、詩歌のほんとの『よ

ろこび』と『秘密性』とが存在するのだ。この道理をはなれて、私は自ら詩を作る意義を知らない。

詩は一瞬間に於ける靈智の産物である。ふだんにもつてゐる所のある種の感情が、電流體の如きものに觸れて始めてリズムを發見する。この電流體は詩人にとつては奇蹟である。詩は豫期して作るべき者ではない。

以前、私は詩といふものを神秘のやうに考へて居た。ある靈妙な宇宙の聖靈と人間の叡智との交靈作用のやうにも考へて居た。或は

また不可思議な自然の謎を解くための鍵のやうにも思つて居た。併し今から思ふと、それは笑ふべき迷信であつた。

詩とは、決してそんな奇怪な鬼のやうなものではなく、實は却つて我々とは親しみ易い兄妹や愛人のやうなものである。

私どもは時々、不具な子供のやうないぢらしい心で、部屋の暗い片隅にすすり泣きをする。さういふ時、ぴつたりと肩により添ひながら、ふるへる自分の心臟の上に、やさしい手をおいてくれる乙女がある。その看護婦の乙女が詩である。

私は詩を思ふと、烈しい人間の**なやみ**とその**よろこび**とをかんずる。

詩は神祕でも象徵でも鬼でもない。詩はただ、病める魂の所有者と孤獨者との寂しいなぐさめである。

詩を思ふとき、私は人情のいぢらしさに自然と涙ぐましくなる。

過去は私にとつて苦しい思ひ出である。過去は焦燥と無爲と惱める心肉との不吉な惡夢であつた。

月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである。疾患する犬の心に、月は靑白い幽靈のやうな不吉の謎である。犬は遠吠えをする。

私は私自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてしまひたい。

影が、永久に私のあとを追つて來ないやうに。

萩原朔太郎

詩集例言

一、過去三年以來の創作九十餘篇中より敍情詩五十五篇、及び長篇詩篇二篇を選びてこの集に納む。集中の詩篇は主として「地上巡禮」「詩歌」「アルス」「卓上噴水」「プリズム」「感情」及び一、二の地方雜誌に掲載した者の中から拔粹した。その他、機會がなくて創作當時發表することの出來なかつたもの數篇を加へた。詩稿はこの集に納めるについては概ね推稿を加へた。

一、詩篇の排列順序は必ずしも正確な創作年順を追つては居ない。

けれども大體に於ては舊稿からはじめて新作に終つて居る。卽ち「竹とその哀傷」「雲雀料理」最も古く、「悲しい月夜」之に次ぎ、「くさつた蛤」「さびしい情慾」等は大抵同年代の作である。而して「見知らぬ犬」と「長詩二篇」とは比較的最近の作に屬す。

一、極めて初期の作で「ザムボア」「創作」等に發表した小曲風のもの、及び「異端」「水甕」「アララギ」「風景」等に發表した二、三の作は此の集では割愛することにした。詩風の關係から詩集の感じの統一を保つためである。

すべて初期に屬する詩篇は作者にとつてはなつかしいものであ

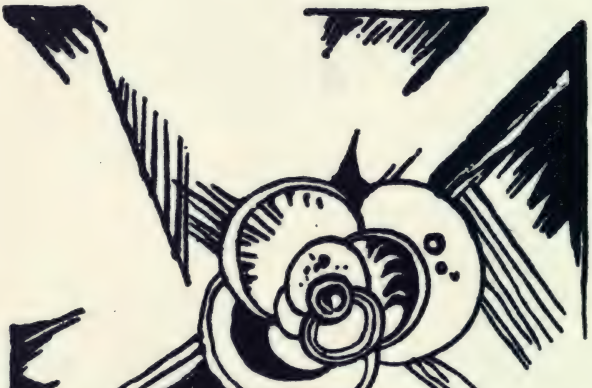
る。それらは機會をみて別の集にまとめることにする。

一、この詩集の装幀に就いては、以前著者から田中恭吉氏にお願ひして氏の意匠を煩はしたのである。所が不幸にして此の仕事が完成しない中に田中氏は病死してしまつた。そこで改めて恩地孝氏にたのんで著者のために田中氏の遺志を次いでもらうことにしたのである。恩地氏は田中氏とは生前無二の親友であつたのみならず、その藝術上の信念を共にすることに於て田中氏とは唯一の知己であつたからである。（尚、本集の挿畫についてはは卷末の附錄「挿畫附言」を參照してもらひたい。）

一、詩集出版に關して恩地孝氏と前田夕暮氏とには色々な方面から

一方ならぬ迷惑をかけて居る。二兄の深甚なる好意に對しては深く感謝の意を表する次第である。

一、集中二、三の舊作は目下の著者の藝術的信念や思想の上から見て飽き足らないものである。併しそれらの詩篇も過去の道程の紀念として貴重なものであるので特に採篇したのである。



詩集

月に吠える

竹とその哀傷

地面の底の病氣の顔

地面の底に顏があらはれ
さみしい病人の顏があらはれ。

地面の底のくらやみに
うらうら草の莖が萠えそめ
鼠の巢が萠えそめ
巢にこんがらかつてゐる
かずしれぬ髮の毛がふるへ出し
冬至のころの
さびしい病氣の地面から
ほそい青竹の根が生えそめ

生えそめ
それがじつにあはれふかくみえ
けぶれるごとくに視え
じつに　じつに　あはれふかげに視え。
地面の底のくらやみに
さみしい病人の顔があらはれ。

草の莖

冬のさむさに
ほそき毛をもてつつまれし
草の莖をみよや
あをらみ莖はさみしげなれども

いちめんにうすき毛をもてつつまれし
草の莖をみよや。
雪もよひする空のかなたに
草の莖はもえいづる。

竹

ますぐなるもの地面に生え
するどき青きもの地面に生え
凍れる冬をつらぬきて
そのみどり葉光る朝の空路に

なみだたれ
なみだをたれ
いまはや懺悔をはれる肩の上より
けぶれる竹の根はひろごり
するどき青きもの地面に生え。

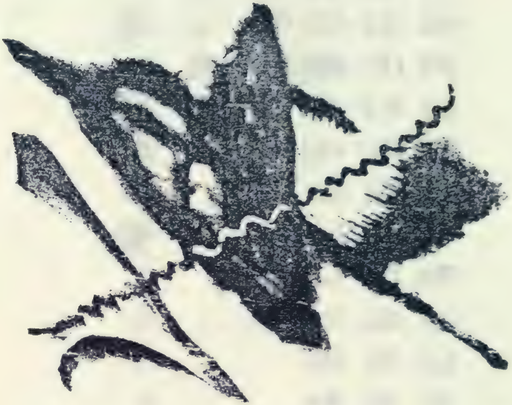
竹

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地下には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ

根の先より繊毛が生え
かすかにけぶる繊毛が生え
かすかにふるへ。

かたき地面に竹が生え
地上にするどく竹が生え
まつしぐらに竹が生え
凍れる節節りんりんと

青空のもとに竹が生え
竹竹竹が生え。



みよすべての罪はしろされたり、
されどすべては我にあらざりき、
まことにわれに現はれしは、
かげなき青き炎の幻影のみ、
雪の上に消えさる哀傷の幽靈の
み、
ああかかる日のせつなる懺悔を
も何かせむ、
すべては青きほのほの幻影のみ。

すえたる菊

その菊は醋え
その菊はいたみしたたる
あはれあれ霜つきはじめ
わがぷらちなの手はしなへ

するどく指をとがらして
菊をつまむとねがふより
その菊をばつむことなかれとて
かがやく天の一方に
菊は病み
饐えたる菊はいたみたる。

龜

林あり
沼あり
蒼天あり
ひとの手にはおもみを感じ

しづかに純金の龜ねむる
この光る
寂しき自然のいたみにたへ
ひとの心靈にまさぐりしづむ
龜は蒼天のふかみにしづむ。

笛

あふげば高き松が枝に琴かけ鳴らす
をゆびに紅をさしぐみて
ふくめる琴をかきならす
ああかき鳴らすひとづま琴の音にもつれぶき

ひみじき笛は天にあり。
けふの霜夜の空に冴え冴え
松の梢を光らして
かなしむものの一念に
懺悔の姿をあらはしぬ。
ひみじき笛は天にあり。

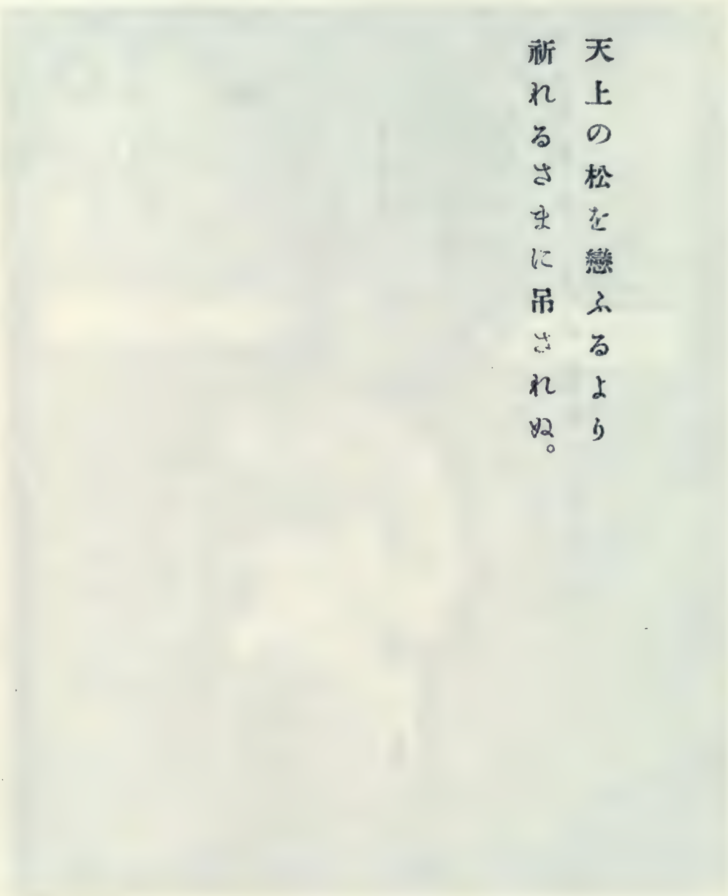
冬

つみとがのしるし天にあらはれ
ふりつむ雪のうへにあらはれ
木木の梢にかがやきいで
ま冬をこえて光るがに

おかせる罪のしるしよもに現はれぬ。
みよや眠れる
くらき土壌にいきものは
懺悔の家をぞ建てそめし。

天上縊死

遠夜に光る松の葉に
懺悔の涙したたりて
遠夜の空にしも白ろき
天上の松に首をかけ。



天上の松を戀ふるより
祈れるさまに吊されぬ。

卵

いと高き梢にありて
ちひさなる卵ら光り
あふげば小鳥の巣は光り
いまはや罪びとの祈るときなる。

雲雀料理

五月の朝の新緑と薫風は私の生活を貴族にする。したたる空色の窓の下で、私の愛する女と共に純銀のふぉうくを動かしたい。私の生活にもいつかは一度、あの空に光る、雲雀料理の愛の皿を盗んで喰べたい。

感傷の手

わが性のせんちめんたる
あまたある手をかなしむ
手はつねに頭上にをどり
また胸にひかりさびしみしが

しだいに夏おとろへ
かへれば燕はや巢を立ち
おほ麥はつめたくひやさる。
あゝ　都をわすれ
われすでに胡弓を彈かず
手ははがねとなり
いんさんとして土地を堀る
いぢらしき感傷の手は土地を堀る。

山居

八月は祈禱
魚鳥遠くに消え去り
桔梗いろおとろへ
しだいにおところへ

わが心いたくおとろへ
悲しみ樹蔭をいです
手に聖書は銀となる。

苗

苗は青空に光り
子供は土地(つち)を掘る
生えざる苗をもとめむとして

あかるき鉢の底より
われは白き指をさしぬけり。

殺人事件

とほい空でぴすとるが鳴る。
またぴすとるが鳴る。
ああ私の探偵は玻璃の衣裝をきて
こひびとの窓からしのびこむ

床は晶玉
ゆびとゆびとのあひだから
まつさをの血がながれてゐる
かなしい女の屍體のうへで
つめたいきりぎりすが鳴いてゐる。

しもつき上旬（はじめ）のある朝
探偵は玻璃の衣裝をきて

街の十字巷路（よつつぢ）を曲つた。
十字巷路に秋のふんすゐ。
はやひとり探偵はうれひをかんず。

みよ　遠いさびしい大理石の歩道を
曲者（くせもの）はいつさんにすべつてゆく。

盆景

春夏すぎて手は琥珀
瞳(め)は水盤にぬれ
石はらんするゐ
いちいちに愁ひをくんず

みよ山水のふかまに
ほそき瀧ながれ
瀧ながれ
ひややかに魚介はしづむ。

雲雀料理

ささげまつるゆふべの愛餐
燭に魚臘のうれひを薰じ
いとしがりみどりの窓をひらきなむ。
あはれあれみ空をみれば

さつきはるばると流るるものを
手にわれ雲雀の皿をささげ
ひとしがり君がひだりにすすみなむ。

掌上の種

われは手のうへに土を盛り
土のうへに種をまく
いま白きぢようろもて土に水をそそぎしに
水はせんせんとふりそそぎ

土(つち)のつめたさはたなごころの上にぞしむ。
ああ　とほく五月の窓をおしひらきて
われは手を日光のはとりにさしのべしが
さわやかなる風景の中にしあれば
皮膚はかぐはしくぬくもりきたり
手のうへの種はいとほしげにも呼吸(いき)づけり。

天景

しづかにきしれ四輪馬車
ほのかに海はあかるみて
麥は遠きにながれたり
しづかにきしれ四輪馬車。

光る魚鳥の天景を
また窓青き建築を
しづかにさしれ四輪馬車。

焦心

霜ふりてすこしつめたき朝を
手に雲雀料理をささげつつ歩みゆく少女あり
そのとき並木にもたれ
白粉もてぬられたる女のほそき指と指との隙間(すきま)を

よくよく窺ひ
このうまき雲雀料理をば盗み喰べんと欲して
しきりになる焦心し
あるひとのごときはあまりに焦心し　まつたく合
掌せるにおよべり。

悲しい月夜

mayami no
makuroki
SORÓ YÓRI

かなしい遠景

かなしい薄暮になれば
労働者にて東京市中が満員なり

それらの憔悴した帽子のかげが
市街(まち)中いちめんにひろがり
あつちの市區でもこつちの市區でも
堅い地面を堀つくりかへす
堀り出して見るならば
煤ぐろい嗅煙草の銀紙だ
重さ五匁ほどもある
にほひ菫のひからびきつた根つ株だ

それも本所深川あたりの遠方からはじめ
おひおひ市中いつたいにおよぼしてくる。
なやましい薄暮のかげで
しなびきつた心臓がじやべるを光らしてゐる。

悲しい月夜

ぬすつと犬めが
くさつた波止場の月に吠えてゐる。
たましひが耳をすますと
陰氣くさい聲をして

黄いろい娘たちが合唄してゐる
合唄してゐる
波止場のくらい石垣で。

いつも
なぜおれはこれなんだ
犬よ
青白いふしあはせの犬よ。

死

みつめる土地(つち)の底から
奇妙きてれつの手がでる
足がでる
くびがでしやばる

諸君
こいつはいつたい
なんといふ鵞鳥だい。
みつめる土地(つち)の底から
馬鹿づらをして
手がでる
足がでる
くびがでしやばる。

危険な散歩

春になつて
おれは新らしい靴のうらにごむをつけた
どんな粗製の歩道をあるいても
あのいやらしい音がしないやうに

それにおれはどつさり壊れものをかかへこんでる
それがなによりけんのんだ。
さあ　そろそろ歩きはじめた
みんなそつとしてくれ
そつとしてくれ
おれは心配で心配でたまらない
たとへどんなことがあつても
おれの歪んだ足つきだけは見ないでおくれ。

おれはぜつたいぜつめいだ
おれは病氣の風船のりみたいに
いつも憔悴した方角で
ふらふらふらふらあるいてゐるのだ。

酒精中毒者の死

あふむきに死んでゐる酒精中毒者（よつぱらひ）の
まつしろい腹のへんから
えたいのわからぬものが流れてゐる
透明な青い血漿と

ゆがんだ多角形の心臟と
腐つたはらわたと
らうまちすの爛れた手くびと
ぐにやぐにやした臟物と
そこらいちめん
地べたはびかびか光つてゐる
草はするどくとがつてゐる
すべてがらぢうむのやうに光つてゐる。

こんなさびしい風景の中にうきあがつて
白つぼけた殺人者の顔が
草のやうにびらびら笑つてゐる。

干からびた犯罪

どこから犯人は逃走した？
ああ　いく年もいく年もまへから
ここに倒れた椅子がある
ここに兇器がある

ここに屍體がある
ここに血がある
さうして靑ざめた五月の高窓にも
おもひにしづんだ探偵のくらい顏と
さびしい女の髪の毛とがふるへて居る。

蛙の死

蛙が殺された
子供がまるくなつて手をあげた
みんないつしよに
かわゆらしい

血だらけの手をあげた
月が出た
丘の上に人が立つてゐる。
帽子の下に顏がある。

幼年思慕篇

くさつた蛤

なやましき春夜の感覚とその疾患

内部に居る人が畸形な病人に見える理由

わたしは窓かけのれいすのかげに立つて居ります
それがわたくしの顔をうすぼんやりと見せる理由です。

わたしは手に遠めがねをもつて居ります
それでわたくしは　ずつと遠いところを見て居り
ます
につける製の犬だの羊だの
あたまのはげた子供たちの歩いてゐる林をみて居
ります
それらがわたくしの瞳(め)を　いくらかかすんでみせ
る理由です。

わたしはけさきやべつの皿を喰べすぎました
そのうへこの窓硝子は非常に粗製です
それがわたくしの顔をこんなに甚だしく歪んで見
せる理由です。
じつさいのところを言へば
わたくしは健康すぎるぐらゐなものです
それだのに　なんだつて君は　そこで私をみつめ
てゐる。

なんだつてそんなに薄氣味わるく笑つてゐる。
おおもちろんわたくしの腰から下ならば
そのへんがはつきりしないといふのならば
いくらか馬鹿げた疑問であるが
もちろんつまりこの青白い窓の壁にそうて
家の内部に立つてゐるわけです。

椅子

椅子の下にねむれるひとは
おほひなる家をつくれるひとの子供らか。

春夜

淺利のやうなもの
蛤のやうなもの
みぢんこのやうなもの
それら生物の身體は砂にうもれ

どこからともなく
絹いとやうな手が無數に生え
手のほそい毛が浪のまにまにうごいてゐる。
あはれこの生あたたかい春の夜に
そよそよと潮みづながれ
生物の上にみづながれ
貝るゐの舌も　ちらちらとしてもえ哀しげなるに
とほく渚の方を見わたせば

ぬれた渚路には
腰から下のない病人の列がわるいてゐる
ふらりふらりと歩いてゐる。
わわ　それら人間の髪の毛にも
春の夜のかすみいちめんにふかくかけ
よせくる　よせくる
このしろき浪の列はさざなみです。

ばくてりやの世界

ばくてりやの足
ばくてりやの口
ばくてりやの耳
ばくてりやの鼻

ばくてりやがおよいでゐる。
あるものは人物の胎内に
あるものは貝るゐの内臓に
あるものは玉葱の球心に
あるものは風景の中心に。

ばくてりやがおよいでゐる。

ばくてりやの手は左右十文字に生え
手のつまさきが根のやうにわかれ
そこからするどい爪が生え
毛細血管の類はべたいちめんにひろがつてゐる。

ばくてりやがおよいでゐる。

ばくてりやが生活するところには
病人の皮膚をすかすやうに
べにいろの光線がうすくさしこんで
その部分だけほんのりとしてみえ
じつに　じつに　かなしみたへがたく見える。
ばくてりやがおよいでゐる。

およぐひと

およぐひとのからだはななめにのびる
二本の手はながくそろへてひきのばされる
およぐひとの心臓（こころ）はくらげのやうにすきとほる
およぐひとの瞳（め）はつりがねのひびきをききつつ

およぐひとのたましひは水のうへの月をみる。

ありあけ

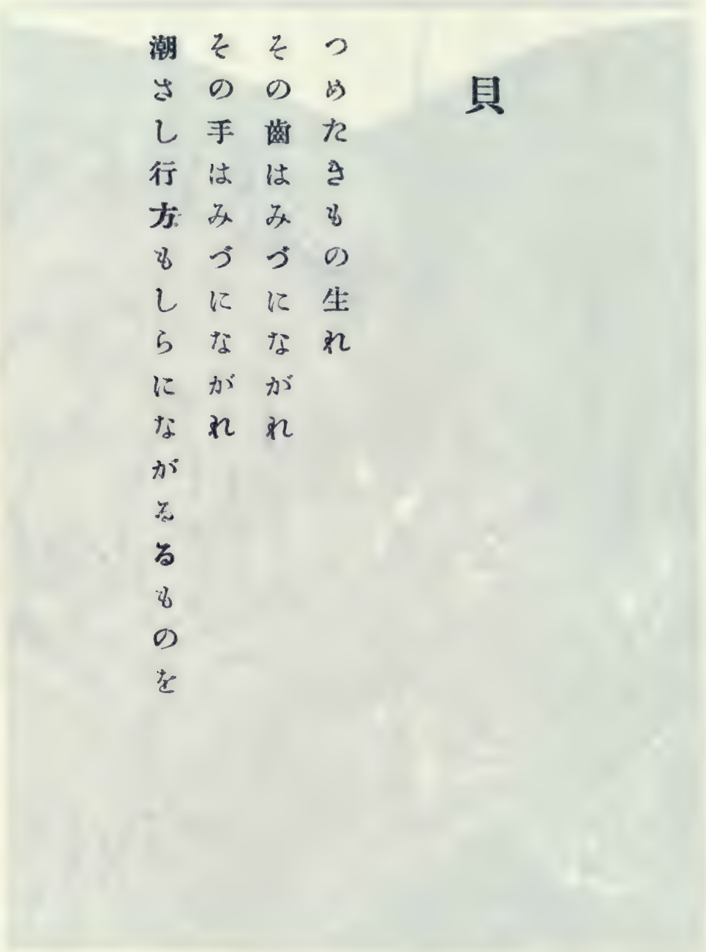
ながい疾患のいたみから
その顔はくもの巣だらけとなり
腰からしたは影のやうに消えてしまひ
腰からうへには藪が生え

手が腐れ
身體いちめんがじつにめちやくちやなり
ああけふも月が出で
有明の月が空に出で
そのぼんぼりのやうなうすらあかりで
畸形の白犬が吠えてゐる。
しののめちかく
さみしい道路の方で吠える犬だよ。

猫

まつくろけの猫が二疋
なやましいよるの家根のうへで
ぴんとたてた尻尾のさきから
糸のやうなみかづきがかすんでゐる。

『おわあ　こんばんは』
『おわあ　こんばんは』
『おぎやあ　おぎやあ　おぎやあ』
『おわああ　ここの家の主人は病氣です』



貝

つめたきものの生れ
その歯はみづにながれ
その手はみづにながれ
潮さし行方もしらにながるるものを

淺瀨をふみてわが呼ばへば
貝は遠音にこたふ。

麥畑の一隅にて

まつ正直の心をもつて
わたくしどもは話がしたい
信仰からきたるものは
すべて幽霊のかたちで視える

かつてわたくしが視たところのものを
はつきりと汝にもきかせたい
およそこの類のものは
さかんに装束せる
光れる
おほいなるかくしどころをもつた神の半身であつ
た。

陽春

ああ春は遠くからけぶつて來る
ぽつくりふくらんだ柳の芽のしたに
やさしいくちびるをさしよせ
をとめのくちづけを吸ひこみたさに

春は遠くからごむ輪のくるまにのつて來る。
ぼんやりした景色のなかで
白いくるまやさんの足はいそげども
ゆくゆく車輪がさかさにまはり
しだいに梶棒が地面をはなれ出し
おまけにお客さまの腰がへんにふらふらとして
これではとてもあぶなさうなと
とんでもない時に春がまつしろの欠伸をする。

くさつた蛤

半身は砂のなかにうもれてゐて
それで居てべろべろ舌を出して居る。
この軟體動物のあたまの上には
砂利や潮(しほ)みづがざらざらざらざら流れてゐる

ながれてゐる
ああ夢のやうにしづかにもながれてゐる。

ながれてゆく砂と砂との隙間から
蛤はまた舌べろをちらちらと赤くもえいづる
この蛤は非常に憔悴れてゐるのである。
みればぐにやぐにやした内臓がくさりかかつて居
るらしい

それゆゑ哀しげな晩かたになると
青ざめた海岸に座つてゐて
ちら　ちら　ちら　ちらとくさつた息をするので
すよ。

春の實體

かずかぎりもしれぬ蟲けらの卵にて
春がみつちりとふくれてしまつた
げにげに眺めみわたせば
どこもかしこもこの類の卵にてぎつちりだ。

櫻のはなをみてゐれば
櫻のはなにもこの卵いちめんに透いてみえ
やなぎの枝にも　もちろんなり
たとへば蛾蝶のごときものさへ
そのうすき羽は卵にてかたちづくられ
それがあのやうに　びかびかびかびかびか光るのだ。
ああ　瞳（め）にもみえざる
このかすかな卵のかたちは楕圓形にして

それがいたるところに押しあひへしあひ
空氣中いつぱいにひろがり
ふくらみきつたごむまりのよに固くなつてゐるの
だ
よくよく指のさきでつついてみたまへ
春といふものの實體がおよそこのへんにある。

贈物にそへて

兵隊どもの列の中には
性分のわるいものが居たので
たぶん標的の圖星をはづした。
銃殺された男が

夢のなかで息をふきかへしたときに
空にはさみしいなみだがながれてゐた。
『これはさういふ種類の煙草です』

さびしい情慾

愛憐

きつと可愛いかたい歯で
草のみどりをかみしめる女よ
女よ
このうす青い草のいんきで

まんべんなくお前の顔をいろどつて
おまへの情慾をたかぶらしめ
しげる草むらでこつそりあそばう
みたまへ
ここにはつりかね草がくびをふり
あそこではりんどうの手がしなしなと動いてゐる
ああわたしはしつかりとお前の乳房を抱きしめる
お前はお前で力いつぱいに私のからだを押へつけ

る

さうしてこの人氣のない野原の中で
わたしたちは蛇のやうなあそびをしよう
ああ私は私できりきりとお前を可愛がつてやり
おまへの美しい皮膚の上に青い草の葉の汁をぬり
つけてやる。

戀を戀する人

わたしはくちびるにべにをぬつて
あたらしい白樺の幹に接吻した
よしんば私が美男であらうとも
わたしの胸にはごむまりのやうな乳房がない

わたしの皮膚からはきめのこまかい粉おしろひの
にほひがしない
わたしはしなびきつた薄命男だ
ああなんといふいぢらしい男だ
けふのかぐはしい初夏の野原で
きらきらする木立の中で
手には空色の手ぶくろをすつぽりとはめてみた
腰にはこるせつとのやうなものをはめてみた

襟には襟おしろひのやうなものをぬりつけた
かうしてひつそりとしなをつくりながら
わたしは娘たちのするやうに
こころもちくびをかしげて
あたらしい白樺の幹に接吻した
くちびるにばらいろのべにをぬつて
まつしろの高い樹木にすがりついた。

五月の貴公子

若草の上をあるいてゐるとき
わたしの靴は白い足あとをのこしてゆく
ほそいすてつきの銀が草でみがかれ
まるめてぬいだ手ぶくろが宙でをどつて居る

ああすつぱりといつさいの憂愁をなげだして
わたしは柔和の羊になりたい
しつとりとした貴女(あなた)のくびに手をかけて
あたらしいあやめおしろひのにほひをかいで居たい
若くさの上をあるいてゐるとき
わたしは五月の貴公子である。

白い月

はげしいむし歯のいたみから
ふくれあがつた頰つぺたをかかへながら
わたしは棗の木の下を掘つてゐた
なにかの草の種を蒔かうとして

きやしやの指を泥だらけにしながら
つめたい地べたを堀つくりかへした
ああ　わたしはそれをおぼえてゐる
うすらさむい日のくれがたに
まあたらしい穴の下で
ちろ　ちろ　とみみづがうごいてゐた
そのとき低い建物のうしろから
まつしろい女の耳を

つるつるとなでるやうに月があがつた
月があがつた。

幼童思慕詩篇

背像

あいつはいつも歪んだ顔をして
窓のそばに突つ立つてゐる
白いさくらが咲く頃になると
あいつはまた地面の底から

むぐらもちのやうに這ひ出してくる
ぢつと足音をぬすみながら
あいつが窓にしのびこんだところで
おれは早取寫眞にうつした

ぼんやりした光線のかげで
白つぼけた乾板をすかして見たら
なにかの影のやうに薄く寫つてゐた。

おれのくびから上だけが
おいらん草のやうにふるへてゐた。

さびしい人格

さびしい人格が私の友を呼ぶ
わが見知らぬ友よ早くきたれ
ここの古い椅子に腰をかけて二人でしづかに話し
てゐよう

なにも悲しむことなくきみと私でしづかな幸福な
日をくらさふ
遠い公園のしづかな噴水の音をきいて居よう
しづかにしづかに二人でかうして抱き合つて居よ
う
母にも父にも兄弟にも遠くはなれて
母にも父にも知らない孤兒の心をむすび合はさう
ありとあらゆる人間の生活の中で

おまへと私だけの生活について話し合はふまづしいたよりない二人だけの秘密の生活についてああその言葉は秋の落葉のやうにそうそうとして膝の上にも散つてくるではないか。
わたしの胸はかよわい病氣したをさな兒の胸のやうだ。

わたしの心は恐れにふるへるせつないせつない熱情のうるみに燃えるやうだ。

ああいつかも私は高い山の上へ登つて行つた
けはしい坂路をあふぎながら虫けらのやうにあこがれて登つて行つた
山の絶頂に立つたとき虫けらはさびしい涙をながした。

あふげばぼうぼうたる草むらの山頂でおほきな白
つぽい雲がながれてゐた。

自然はどこでも私を苦しくする
そして人情は私を陰鬱にする
むしろ私はにぎやかな都會の公園を歩きつかれて
とある寂しい木蔭に椅子をみつけるのが好きだ
ぼんやりした心で空を見てゐるのが好きだ

ああ都會の空をとほく悲しくながれてゆく煤煙
またその建築の屋根をこえてはるかに小さくつばめの飛んで行く姿を見るのが好きだ。

よにもさびしい私の人格が
おほきな聲で見知らぬ友をよんで居る
わたしの卑屈な不思議な人格が
鴉のやうなみすぼらしい様子をして

人氣のない冬枯れの椅子の片隅にふるへて居る。

見知らぬ犬

見しらぬ犬

この見もしらぬ犬が私のあとをついてくる
みすぼらしい　後足でびつこをひいてゐる不具(かたわ)の
犬のかげだ。

ああ　わたしはどこへ行くのか知らない
わたしのゆく道路の方角では
長屋の家根がべらべらと風にふかれてゐる
道ばたの陰氣な空地では
ひからびた草の葉つぱがしなしなとほそくうごいて居る。

ああ　わたしはどこへ行くのか知らない

おほきないきもののやうな月がぼんやりと行手に
浮んでゐる
さうして背後（うしろ）のさびしい往來では
犬のほそながい尻尾の先が地べたの上をひきづつ
て居る。

ああ　どこまでもどこまでも
この見もしらぬ犬が私のあとをついてくる

きたならしい地べたを這ひまはつて
わたしの背後(うしろ)で後足をひきづつてゐる病氣の犬だ
とほく　ながく　かなしげにおびえながら
さびしい空の月に向つて遠白く吠えるふしあはせ
の犬のかげだ。

青樹の梢をあふぎて

まづしいさみしい町の裏通りで
青樹がほそほそと生えてゐた。

わたしは愛をもとめてゐる
わたしを愛する心のまづしい乙女を求めてゐる
そのひとの手は靑い梢の上でふるへてゐる
わたしの愛を求めるために　いつも高いところで
やさしい感情にふるへてゐる。

わたしは遠い遠い街道で乞食をした

みぢめにも飢ゑた心が腐つた葱や肉のにほひを嗅いで涙をながした
うらぶれはてた乞食の心でいつも町の裏通りを歩きまはつた。

愛をもとめる心はかなしい孤獨の長い長いつかれの後にきたる
それはなつかしいおほきな海のやうな感情である。

道ばたのやせ地に生えた青樹の梢で
ちつぽけな葉つぱがひらひらと風にひるがへつて
ゐた。

蛙よ

蛙よ
青いすゝきやよしの生えてる中で
蛙は白くふくらんでゐるやうだ
雨のいつぱいにふる夕景に

ぎよ　ぎよ　ぎよ　ぎよ　と鳴く蛙（かへる）。
まつくらの地面をたたきつける
今夜は雨や風のはげしい晩だ
つめたい草の葉つぱの上でも
はつと息をすひこむ蛙（かへる）
ぎよ　ぎよ　ぎよ　ぎよ　と鳴く蛙（かへる）。

蛙よ
わたしの心はお前から遠くはなれて居ない
わたしは手に燈灯をもつて
くらい庭の面を眺めて居た
雨にしほるる草木の葉を　つかれた心もちで眺め
て居た。

山に登る

旅よりある女に贈る

山の頂上にきれいな草むらがある
その上でわたしたちは寢ころんで居た。
眼をあげてとほい麓の方を眺めると
いちめんにひろびろとした海の景色のやうにおも

はれた。
空には風がながれてゐる
おれは小石をひろつて口にあてながら
どこといふあてもなしに
ぼうぼうとした山の頂上をあるいてゐた

おれはいまでも　お前のことを思つてゐるのである。

海水旅館

赤松の林をこえて
くらきおほなみはとほく光つてゐた
このさびしき越後の海岸
しばしはなにを祈るこころぞ

ひとり夕餉ををはりて
海水旅館の居間に灯(ひ)を點ず。

くぢら浜海岸にて

孤獨

田舍の白っぽい道ばたで
つかれた馬のこころが
ひからびた日向の草をみつめてゐる
ななめに
しのしのとほそくもえる

ふるへるさびしい草をみつめる。

田舍のさびしい日向に立つて
おまへはなにを視てゐるのか
ふるへる　わたしの孤獨のたましひよ。

このほこりつぽい風景の顏に
うすく淚がながれてゐる。

白い共同椅子

森の中の小徑にそうて
まつ白い共同椅子がならんでゐる
そこらはさむしい山の中で
たいそう綠のかげがふかい

あちらの森をすかしてみると
そこにもさみしい木立がみえて
上品なまつしろな椅子の足がそろつてゐる。

田舍を恐る

わたしは田舍をおそれる
田舍の人氣のない水田の中にふるへて
ほそながくのびる苗の列をおそれる。
くらい家屋の中に住むまづしい人間のむれをおそ

れる。
田舍のあぜみちに座つてゐると
おほなみのやうな土壤の重みが　わたしの心をく
らくする
土壤のくさつたにほひが私の皮膚をくろづませる
冬枯れのさびしい自然が私の生活をくるしくする。
田舍の空氣は陰鬱で重くるしい

田舍の手觸りはざらざらして氣もちがわるい
わたしはときどき田舍を思ふと
きゝめのあらい動物の皮膚のにほひに腦まされる。
わたしは田舍をおそれる
田舍は熱病の青じろい夢である。

長詩二篇

雲雀の巣

おれはよにも悲しい心を抱いて故郷の河原を歩いた。
河原にはよめなつくしのたぐひせりなづな
すみれの根もぼうぼうと生えてゐた。

その低い砂山の蔭には利根川がながれてゐる　ぬすびとのやうに暗くやるせなく流れてゐる

おれはぢつと河原にうづくまつてゐた。

おれの眼のまへには河原よもぎの草むらがある。

ひとつかみほどの草むらである。蓬はやつれた女の髪の毛のやうに　へらへらと風にうごいてゐた。

おれはあるいやなことをかんがへこんでゐる。それは恐ろしく不吉なかんがへだ。

そのうへ　きちがひじみた太陽がむしあつく帽子
の上から照りつけるので　おれはぐつたり汗ばん
でゐる。
あへぎ苦しむひとが水をもとめるやうに　おれは
ぐいと手をのばした。
おれのたましひをつかむやうにしてなにものかを
つかんだ。
干からびた髪の毛のやうなものをつかんだ。

河原よもぎの中にかくされた雲雀の巣。
びよ　びよ　びよ　びよ　びよ　びよ　びよ　び
よと空では雲雀の親が鳴いてゐる。
おれはかわいそうな雲雀の巣をながめた。
巣はおれの大きな掌の上で　やさしくも毬のやう
にふくらんだ。
いとけなく育（はぐ）くまれるものの愛に媚びる感覚が

あきらかにおれの心にかんじられた。
おれはへんてこに寂しくそして苦しくなつた。
おれはまた親鳥のやうに頸をのばして巣の中をのぞいた。
巣の中は夕暮どきの光線のやうに　うすぼんやりとしてくらかつた。
かぼそい植物の繊毛に觸れるやうな　たとへやうもなくDELICATEの哀傷が　影のやうに神經の末梢

をかすめて行つた。
巣の中のかすかな光線にてらされて　ねずみいろ
の雲雀の卵が四つほどさびしげに光つてゐた。
わたしは指をのばして卵のひとつをつまみあげた。
生あつたかい生物の呼吸が親指の腹をくすぐつた。
死にかかつた犬をみるときのやうな歯がゆい感覺
が　おれの心の底にわきあがつた。
かういふときの人間の感覺の生ぬるい不快さから

惨虐な罪が生れる　罪をおそれる心は罪を生む心
のさきがけである。
おれは指と指とにはさんだ卵をそつと日光にすか
してみた。
うす赤いぼんやりしたものが血のかたまりのやう
に透いてみえた。
つめたい汁のやうなものが感じられた
そのとき指と指とのあひだに生ぐさい液體がじく

じくと流れてゐるのをかんじた。
卵がやぶれた
野蠻な人間の指が　むざんにも纖細なものを押し
つぶしたのだ。
鼠いろの薄い卵の殼にはKといふ字が　赤くほん
のりと書かれてゐた。

いたいけな小鳥の芽生　小鳥の親。

その可愛いらしいくちばしから造つた巣　一生けんめいでやつた小動物の仕事　愛すべき本能のあらはれ。

いろいろな善良な　しほらしい考が私の心の底にはげしくこみあげた。

おれは卵をやぶつた。

愛と悦びとを殺して悲しみと呪ひとにみちた仕事をした。

くらい不愉快なおこなひをした。
おれは陰鬱な顔をして地面をながめつめた。
地面には小石や硝子かけや草の根などがいちめんにかがやいてゐた。
ぴよ ぴよ ぴよ ぴよ ぴよ ぴよ ぴよ ぴ
よと空では雲雀の親が鳴いてゐる。
なまぐさい春のにほひがする。

おれはまたゐのいやいやのことをかんがへこんだ。
人間が人間の皮膚のにほひを嫌ふといふこと。
人間が人間の生殖機を醜悪にかんずること。
あるとき人間が馬のやうに見えること。
人間が人間の愛にうらぎりすること。
人間が人間をきらふこと。
ああ、厭人病者。
ある有名なロシヤ人の小説、非常に重たい小説を

よむと厭人病者の話が出て居た。
それは立派な小說だ　けれども恐ろしい小說だ。
心が愛するものを肉體で愛することの出來ないと
いふのは　なんたる邪惡の思想であらう。　なんた
る醜惡の病氣であらう。
おれは生れていつぺんでも娘たちに接吻したこと
はない。
ただ愛する小鳥たちの肩に手をかけて　せめては

兄らしい言葉を言つたこともない。
ああ　愛する　愛する　愛する　愛する小鳥たち。
おれは人間を愛する。　けれどもおれは人間を恐れる。
おれはときどき　すべての人々から脱れて孤獨になる。　そしておれの心は　すべての人々を愛することによつて涙ぐましくなる。
おれはいつでも　人氣のない寂しい海岸を歩きな

から　遠い都の雜閙を思ふのがすきだ。
遠い都の灯ともし頃に　ひとりで故郷の公園地を
あるくのがすきだ。
ああ　きのふもきのふとて　おれは悲しい夢をみ
つづけた。
おれはくさつた人間の血のにほひをかいだ。
おれはくるしくなる。
おれはさびしくなる。

心で愛するものを　なにゆゑに肉體で愛すること
ができないのか。
おれは懺悔する
懺悔する。
おれはいつでも　くるしくなると懺悔する。
利根川の河原の砂の上に座つて懺悔をする。
ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴよ　ぴ

よと　空では雲雀の親たちが鳴いてゐる。
河原蓬の根がぼうぼうとひろがつてゐる。
利根川はぬすびとのやうにこつそりと流れてゐる。
あちらにも　こちらにも　うれはしげな農人の顔
がみえる。
それらの顔はくらくらくして地面をばかりみる。
地面には春が疱瘡のやうにむつくりと吹き出して
居る。

おれはいぢらしくも雲雀の卵を拾ひあげた。

笛

子供は笛が欲しかつた。

その時子供のお父さんは書きものをして居るらしく思はれた。

子供はお父さんの部屋をのぞきに行つた。

子供はひつそりと扉のかげに立つて居た。

扉のかげにはさくらの花のにほひがする。

そのとき室内で大人はかんがへこんでゐた

大人の思想がくるくると渦まきをしたある混み

入つた思想のぢれんまが大人の心を痙攣させた。

みれば　ですくの上に突つ伏した大人の額をい

つのまにか蛇がぎりぎりとまきつけてゐた。

それは春らしい今朝の出來事がそのひとの心を
愛はしくしたのである。

本能と良心と
わかちがたき一つの心をふたつにわかたんとする
大人の心のうらさびしさよ
力をこめて引きはなされた二つの影は糸のやう
にもつれふひつつほのぐらき明窓のわたりをさ

まよひた。

人は自分の頭のうへに　それらの悲しい幽靈の通りゆく姿をみた。

大人(おとな)は恐ろしさに息をひそめながら祈をはじめた

「神よ　ふたつの心をひとつにすることなからしめたまへ」

けれどもながいあひだ　幽靈は扉(とひら)のかげを出這入りした。

扉のかげにはさくらの花のにほひがした。
そこには青白い顏をした病身のかれの子供が立つて居た。
子供は笛が欲しかつたのである。
子供は扉をひらいて部屋の一隅に立つてゐた。
子供は窓際のでゝすゝくに突つ伏したおほいなる父の頭腦をみた。

その頭腦のあたりは甚だしい陰影になつてゐた。
子供の視線が蠅のやうにその場所にとまつてゐた。
子供のわびしい心がなにものかにひきつけられて
ゐたのだ。
しだいに子供の心が力をかんじはじめた
子供は實にはつきりとした聲で叫んだ。
みればそこには笛がおいてあつたのだ。
子供が欲しいと思つてゐた紫いろの小さい笛があ

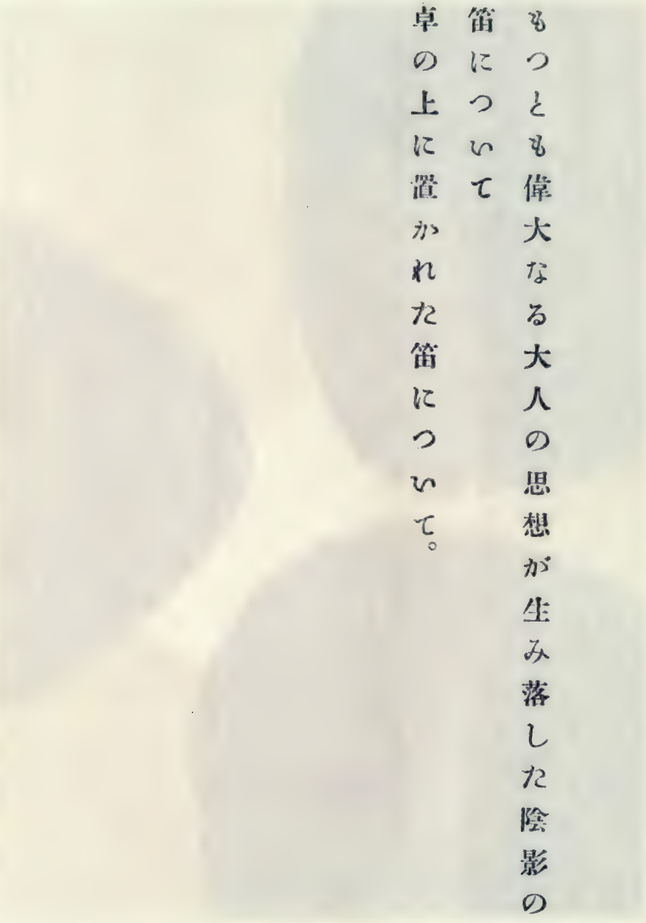
つたのだ。

子供は笛に就いてなにごとも父に話してはなかつた。

それ故この事實はまつたく偶然の出來事であつた。

おそらくはなにかの不思議なめぐりあはせであつたのだ。

けれども子供はかたく父の奇蹟を信じた。



もつとも偉大なる大人の思想が生み落した陰影の
笛について
卓の上に置かれた笛について。

跋

健康の都市

君か詩集の終りに

大正二年の春もおしまひのころ、私は未知の友から一通の手紙をもらつた。私が當時雜誌ザムボアに出した小景異情といふ小曲風な詩について、今の詩壇では見ることの出來ない純な眞實なものである。これからも君はこの道を行かれるやうに祈ると書いてあつた。私は未見の友達から手紙をもらつたことが此れが生れて初めてであ

り又た此れほどまで鋭どく韻律の一端をも漏さぬ批評に接したことも之れまでには無かつたことである。私は直覺した。これは私とほぼ同じいやうな若い人であり境遇もほぼ似た人であると思つた。ちようど東京に一年ばかり漂泊して歸つてゐたころで親しい友達といふものも無かつたので、私は饑ゑ渇いたやうにこの友達に感謝した。それからといふものは私だちは毎日のやうに手紙をやりとりして、ときには世に出さない作品をお互に批評し合つたりした。

　私はときをり寺院の脚高な椽側から國境山脈をゆめのやうに眺めながら此の友のゐる上野國や能く詩にかかれる利根川の堤防などを懷しく考へるやうになつたのである。會へばどんなに心分(こゝろもち)の觸れ合

ふことか。いまにも飛んで行きたいやうな氣が何時も瞼を熱くした。この友もまた逢つて話したいなぞと、まるで二人は戀しあふやうな烈しい感情をいつも長い手紙で物語つた。私どもの純眞な感情を植ゑ育ててゆくゆく日本の詩壇に現はれ立つ日のことや、またどうしても詩壇の爲めに私どもが出なければならないやうな圖拔けた強い意志も出來てゐた。どこまで行つても私どもはいつも離れないでゐようと女性と男性との間に約されるやうな誓ひも立てたりした。

大正三年になつて私は上京した。そして生活といふものと正面からぶつかつて、私はすぐに疲れた。その時はこの友のゐる故鄕とも

近くなつてゐたので、私は草臥れたままですぐに友に逢ふことを喜んだ。友はその故郷の停車場でいきなり私のうろうろしてゐるのをつかまへた。私どもは握手した。友はどこか品のある瞳の大きな想像したとほりの毛唐のやうなところのある人であつた。私どもは利根川の堤を松並木のおしまひに建つた旅館まで俥にのつた。淺間のけむりが長くこの上野まで尾を曳いて寒い冬の日が沈みかけてゐた。

旅館は利根川の上流の、市街はづれの靜かな磧に向つて建てられてゐた。すぐに庭下駄をひつかけて茫茫とした磧へ出られた。二月だといふのにいろいろなものの芽立ちが南に向いた畦だの崖だのにぞくぞく生えてゐた。友はよくこの磧から私をたづねてくれた。私

どもは詩を見せ合つたり批評をし合つたりした。

大正四年友は出京した。

私どもは毎日會つた。そして私どもの狂はしいＢＡＲの生活が初まつた。暑い八月の東京の街路で時には劇しい議論をした。熱い熱い感情は鐵火のやうな量のある愛に燃えてゐた。ときには根津權現の境内やＢＡＲの卓(テーブル)の上で詩作をしたりした。私は私で極度の貧しさと戰ひながらも盃は唇を離れなかつた。そしていつも此友にやつかいをかけた。

間もなく友は友の故郷へ私は私の國へ歸つた。そして端なく私どもの心持を結びつけるために『卓上噴水』といふぜいたくな詩の雜

誌を出したが三册でつぶれた。

私どもが此の雜誌が出なくなつてからお互にまた逢ひたくなつたのである。友は私の生國に私を訪問することになつた。私のかいた海岸や砂丘や靜かな北國の街々などの景情が友を遠い旅中の人として私の故鄕を訪づれた。私が三年前に友の故鄕を友とつれ立つて歩いたやうに、私は友をつれて故鄕の街や公園を紹介した。私のゐるうすくらい寺院を友は私のゐそうな處だと喜んだ。または廓の日ぐれどきにあちこち動く赤襟の美しい姿を珍らしがつた。または私が時時に行く海岸の尼寺をも案內した。そこの砂山を越えて遠い長い渚を步いたりして荒い日本海をも紹介した。それらは私どもを小供

のやうにして樂しく日をくらさせた。そのころ私は愛してゐた一少女をも紹介した。

友は間もなくかへつた。それから友からの消息はばつたりと絶えた。友の肉體や思想の內部にいろいろの變化が起つたのも此時からである。手紙や通信はそれからあとは一つも來なかつた。私は哀しい氣がした。あの高い友情は今友の內心から突然に消え失せたとは思へなかつた。あのやうな烈しい愛と熱とがもう私と友とを昔日のやうに結びつけることが出來なくなつたのであらうか。私には然う思へなかつた。

『竹』といふ詩が突然に發表された。からだぢうに巢喰つた病氣が

腐れた噴水のやうに、友の詩を味ふ私を不安にした。友の肉體と魂とは晴れた日にをゝをゝと伸上つた『竹』におびやかされた。竹を感じる力は友の肉體の上にまで重量を加へた。かれは、からだぢう竹が生えるやうな神經系統にぞくする恐竹病におそはれた。そしてまた友の肉體に潜んだいろいろな苦悶と疾患とが、友を非常な神經質な針のさきのやうなちくちくした痛みを絶えず經驗させた。

ながい疾患のいたみから
その顏は蜘蛛の巣だらけとなり
腰から下は影のやうに消えてしまひ
腰から上には竹が生え

手が腐れ
しんたいいちめんがじつにめちやくちやになり
あをけふも月が出で
有明の月が空に出で
そのぼんぼりのやうなうすあかりで
畸形の白犬が吠えて居る
しののめちかく
さむしい道路の方で吠える犬だよ。

私はこの詩を讀んで永い間考へた。あの利根川のほとりで土筆やたんぽぽ又は匂ひ高い抒情小曲などをかいた此れが紅顔の彼の詩であらうか。かれの心も姿もあまりに變り果てた。かれはきみのわる

い畸形の犬がぼうぼうと吠える月夜をぼんぼりのやうに病みつかれて歩いてゐる。ときは春の終りのころでもあらうか。二年にもあまる永い病氣がすこしよくなりかけ、ある生ぬるい晩を歩きにでると世の中がすつかり變化つてしまつたやうに感じる。永遠といふものの力が自分のからだを外にしても斯うして空と地上とに何時までもある。道路の方で白い犬が、ゆめのやうなミステックな響をもつてぼうぼうと吠えてゐる。そして自分の頭がいろいろな病のために白痴のやうにぼんやりしてゐる。ああ月が出てゐる。

私は次の頁をかへす。

遠く渚の方を見わたせば
ぬれた渚路には
腰から下のない病人の列が歩いてゐる
ふらりふらりと歩いてゐる

彼にとつては總てが變態であり恐怖であり幻惑であつた。かれの靜かな心にうつつてくるのは、かれの病みつかれた顏や手足にまつはる惱ましい蜘蛛の巢である。彼は殆んど白痴に近い感覺の最も發作の靜まつた時にすら、その指さきからきぬいとのやうなものの垂れるのを感じる。その幻覺はかれの魂を慰める。あわ蒼白なこの友が最もふしぎに最も自然に自分の指をつくづく眺めてゐるのに出會

して涙なきものがゐようか。私と向ひ合つた怜悧な眼付はどんよりとして底深いところから靜かに實に不審な病夢を見てゐるのである。

それらの詩篇が現はれると間もなく又ぱつたり作がなかつた。私のところへも通信もなかつた。私から求めると今私に手紙をくれるなとばかり何事も物語らなかつた。たうとう一年ばかり彼は誰にも會はなかつた。かれにとつて凡ての風景や人間がもう平氣で見てゐられなくなつた。ことに人を怖れた。まがりくねつて犬のやうに病んだ心と、人間のもつとも深い罪や科やに對して彼は自らを祈るに先立つて、その祈りを犯されることを厭ふた。ひとりでゐることを、

ひとりで祈ることを、ひとりで苦しみ考へることを、ああ、その間にも彼の疾患は辛い辛い痛みを加へた。かれはヨブのやうな苦しみを試みられてゐるやうでもあつた。なぜに自分はかやうに肉體的に病み苦しまなければならないかとさへ叫んだ。

かれにとつて或る一點を凝視するやうな祈禱の心持！どうにかして自分の力を、今持つてゐる意識を最つと高くし最つと良くするためにも此疾患を追ひ出してしまひたいとする心持！この一卷の詩の精神は、ここから發足してゐるのであつた。

彼の物語の深さはものの内臟にある。くらい人間のお腹にぐにや

ぐにやに詰つたいろいろな機械の病んだもの腐れかけたもの死にさうなものの類ひが今光の方面を向いてゐる。光の方へ。それこそ彼の求めてゐる一切である。彼の詩のあやしさはポオでもボドレエルでもなかつた。それはとうてい病んだものでなければ窺知することのできない特種な世界であつた。彼は祈つた。かれの祈禱は詩の形式であり懺悔の器でもあつた。

凍れる松が枝に
祈れるままに吊されぬ

といふ天上縊死の一章を見ても、どれだけ彼が苦しんだことかが判る。かれの詩は子供がははおやの白い大きい胸にすがるやうにすなほな極めて懐しいものも其疾患の絶え間絶え間に物語られた。

萩原君。

私はここまで書いて此の物語が以前に送つた跋文にくらべて、どこか物足りなさを感じた。君がふとしたことから跋文を紛失したと青い顔をして來たときに思つた。あれは再度かけるものではない。かけても其書いてゐたときの熱情と韻律とが二度と浮んでこないことを苦しんだ。けれどもペンをとると一氣に十枚ばかり書いた。け

れどもこれ以上書けない。これだけでは兄の詩集をけがすに過ぎぬ。一つは兄が私の跋文を紛失させた罪もあるが。

唯私はこの二度目の此の文章をかいて知つたことは、兄の詩を餘りに愛し過ぎ、兄の生活をあまりに知り過ぎてゐるために、私に批評が出來ないやうな氣がすることだ。思へば私どもの交つてからもう五六年になるが、兄は私にとつていつもよい刺戟と鞭達を與へてくれた。あの奇怪な『猫』の表現の透徹した心持は、幾度となく私の模倣したものであつたが物にならなかつた。兄の纖細な恐ろしい過敏な神經質なものの見かたは、いつもサイコロジカルに滲透してゐた。そこへは私は行かうとして行けなかつたところだ。

兄の健康は今兄の手にもどらうとしてゐる。兄はこれからも變化するだらう。兄のあつい愛は兄の詩をますます砥ぎすました者にするであらう。兄にとつて病多い人生がカラリと晴れ上つて兄の肉體を溫めるであらう。私は兄を祝福する。兄のためにこの人類のすべてが最つと健康な幸福を與へてくれるであらう。そして兄が此の惱ましくも美しい一卷を抱いて街頭に立つとしたらば、これを讀むものはどれだけ兄が苦しんだかを理解するやうになる。此の數多い詩篇をほんとに解るものは、兄の苦しんだものを又必然苦しまねばならぬ。そして皆は兄の蒼白な手をとつて親しく微笑して更らに健康と勇氣と光との世界を求めるやうになるであらう。更らにこれらの

詩篇によつて物語られた特異な世界と、人間の感覺を極度までに纖細に鋭どく働かしてそこに神經ばかりの例令へば齒痛のごとき苦悶を最も新らしい表現と形式によつたことを皆は認めるであらう。

も一歩進んで言へば君ほど日本語にかげと深さを注意したものは私の知るかぎりでは今までには無かつた。君は言葉よりもそのかげと量と深さとを音樂的な才分とで創造した。君は樂器で表現できないリズムに注意深い耳をもつてゐた。君自らが音樂家であつたといふ事實をよそにしても、いろはにほへを鍵盤にした最も進んだ詩人の一人であつた。

ああ君の魂に祝福あれ。

大聲でしかも地響のする聲量で私は呼ぶ。健康なれ！おお健康なれ！。と。

千九百十六年十二月十五日深更

東京郊外田端にて

室生犀星

月に吠える　　完

挿畫附言

詩集附錄

朔太郎兄

私の肉體の分解が遠くないといふ豫覺が私の手を着實に働かせて呉れました。兄の詩集の上梓されるころ私の影がどこにあるかと思ふさへ微笑されるのです。

私はまづ思つただけの仕事を仕上げました。この一年は貴重な附加でした。

いろんな人がいろんなことを言ふ。それが私に何になるでせう。心臟が右の胸でときめき。手が三本あり、指さきに透明紋がひかり、二つの生殖器を有する。それが私にとつてたつた一つの眞實！

蒼白の藝術の微笑です。かの蒼空と合一するよろこびです。

恭　吉

傷みて　なほも　ほほゑむ　芽なれば　いとど　かはゆし
こころよ　こころよ　しづまれ　しのびて　しのびて　この
べよ

■

むなしき　この日の　涯に　ゆふべを　迎へて　懼るる
ひと日に　ひと日を　かされて　なに　まち侘ぶる　こころ
か

こよひも　いたく　さみしき　かなしみに　包まり　眠れむ
さはあれ　まどの　かなたに　まどかに　滿ゆる　ゆふづき

■

痴愚の　なみたを　ぬぐひて　わが　しかばねに　見入れよ
あふげば　青空(そら)を　ながるる　やはらかき　雲の　こころね

わかれし　ものの　かへりて　身につき　まつばる　うれし
さ
すこやかよ　すこやかよ　疾く　かへりね　わがやに

月映　告別號より　恭　吉

挿畫附言

萩原君の詩は凡そ獨特なものだ。その獨特さに共通した心緒を持つ故田中恭吉がその挿畫を完成しないで逝いたのは遺憾なことだ。ただその畫稿が殘つてゐたことがせめてもの幸でした。彼の最後の手紙に、

「私はとうて筆をとれない私の熱四十度を今二三度出れば私の脉百四十を、いま二三十出れば私は亡くなる。私はいますべてをすてて健康を欲してゐる。最初私は氏の詩歌の挿畫に百枚の豫稿をつくり其の中から二十――三十の繪を選んで美しいものにしたいと思つた。そして(不明)上な勢で着手し畫稿五葉をつくりしのち臥床した。」――一九一五年八月、その死後、彼の從弟の厚意によつて私の手許に集まつたのが、この藥の包紙の表裏にかきつけた十三枚の畫稿と、口繪の金色の繪であつた。外にどれ程あつたか分らない。十三枚の畫でさへ、心なき消毒人によつて害はれ浸みほけてゐる。前者は赤い藥紙に赤いインキで書かれ、後者は黒い羅紗紙に金色のインキでかかれてゐる。

之らの繪は彼の死ぬ三月まへに執筆せられ彼の遺したものの最も後のものです。一九一五年七月。兩種とも製版複製の困難なものであるだけ畫趣が損じた。遺憾とする。すべて畫題はない。裝幀についても、彼の構想を見るべき草稿があるけれど、それは依ることの出來ない程の草稿なので止むなくそれから適はしいものを取り出でて、心持を移して私が作つた。

挿畫についでは彼はかういつてゐる。「他人の詩集に挿畫するのは重大だと思ふ。だから私がもしそれをやる場合にはむしろ原詩に執しないわがままな畫を挿みたいと思ふ。」併し乍ら、他から、私が見るに彼の資性と萩原君の資性との類似といふことよりも、いみぢい交通からなる。それは不識の美しい人生の共歡だが、倍加された緊密な美がある。むろん恭吉自身のものであるが又同時に彼一個のものでもない。この病弱な、纖細な、又死に對しての生の執着の明るいそして暗い世界の存在に呼吸した生息がこれらの

一線にも浸み出てゐる。一九一四年七月

「死人とあとに殘れるもの」及「冬の夕」は共に一九一四年十二月、彼が病苦から輕くせられてゐた頃、その「死」の體覺及「發病の回想」から生れた心境と見るべく前者は畫稿では鉛筆のあとを止めてゐる。

「悔恨」及「懈怠」は、翌年二月、書きためた畫稿をまとめて集とした「心原幽趣」のうちから拔いた、その序詞。

「これ痛き感謝のこころなり。なみだにぬれしほほゑみなり。おもへばきのふ死なむとしてあやふくも生きながらへたる身かな。——略——しへたげられ　さいなまれつつ、いかばかり生きのちからのいみぢきかを　ためさむれがひなり。」

「悔恨」は過ぎし日のあやかしのいのちをかへりみて。「懈怠」は病み疲れた肉心の嫉忌と、又ある背惰と又腐れ果つべき肉體と。それらの心境を示して美しく。

假りに名づけて「こもろみのむし」とするものは恐らく同年二月――三月にかかれたものであろふ。仕上つた畫ではないけれども、こもろ病體と、外界の光輝の痛さ鋭さが美しくかかれてゐる。

扉にしたものは小さいアイボリ紙にかいたもので詩集空にさくエーテルの花などと横にかいてあるのをとつて畫題とした、この世は光しい。一九一五年上半期。

包紙に用ひた「夜の花」は彼自身、もしも詩集でも出すことがあれば表紙にするのだといつたもので、いま、採りてこの詩集に用ひた。一九一五年一月、發病後小康を得て東京市外池袋に起臥した頃かいたもので、ワットマン紙に丹念にかかれてある。印刷で止むなく畫を損じたけれど彼の纎細な清麗な情趣が籠められてゐる。

私の挿畫については別にいふべくない。すべてこの集について版を刻つたもの。

最後に、この集が三者の心緒に快く交通して成つたことの紀銘を殘しておく。

一九一六年十二月　恩地孝四郎

故田中恭吉氏の藝術に就いて

雜誌「月映」を通じて、私が恭吉氏の藝術を始めて知つたのは、今から二年ほど以前のことである。當時、私があの素ばらしい藝術に接して、どんなに驚異と嘆美の瞳をみはつたかと言ふことは、殊更らに言ふまでもないことであらう。實に私は自分の求めてゐる心境の世界の一部分を、田中氏の藝術によつて一層はつきりと凝視することが出來たのである。

その頃、私は自分の詩集の裝幀や挿畫を依賴する人を物色して居た際なので、この新らしい知己を得た悅びは一層深甚なものであつた。まもなく恩地孝氏の紹介によつて私と恭吉氏とは、互にその鄉里から書簡を往復するやうな間柄になつた。

幸にも、恭吉氏は以前から私の詩を愛讀して居られたので、二人の友情はたちまち深い所まで進んで行つた。當時、重患の病床中にあつた恭吉氏は、私の詩集の計畫をきいて自分のことのやうに悦んでくれた。そしてその裝幀と挿畫のために、彼のすべての「生命の殘部」を傾注することを約束された。

とはいへ、それ以來、氏からの消息はばつたり絕えてしまつた。そして恩地氏からの手紙では「いよいよ恭吉の最後も近づいた」といふことであつた。それから暫らくして或日突然、恩地氏から一封の書留小包が屆いた。それは恭吉氏の私のために傾注しつくされた「生命の殘部」であつた。床中で握りつめながら死んだといふ傷ましい形見の遺作であつた。私はきびしい心でそれを押戴いた。(この詩集に挿入した金泥の口繪と、赤地に赤いインキで薄く畫いた線畫がその形見である。この赤い繪は、劇藥を包む赤い四角の紙に赤いインキで描かれてあつた。恐らくは未完成の下圖であつたらう。非常に綮

擬した鋭どいものである、その他の數葉は氏の遺作集から恩地君が選拔した。」

恭吉氏は自分の藝術を稱して、自ら「傷める芽」と言つて居た。世にも稀有な鬼才をもちながら、不幸にして現代に認められることが出來ないで、あまつさへその若い生涯の殆んど全部を不治の病床生活に終つて寂しく夭死して仕舞つた無名の天才畫家のことを考へると、私は胸に釘をうたれたやうな苦しい痛みをかんずる。

思ふに恭吉氏の藝術は「傷める生命(いのち)」そのもののやるせない絶叫であつた。實に氏の藝術は「語る」といふのではなくして、殆んど「絶叫」に近いほど張りつめた生命の苦喚の聲であつた。私は日本人の手に成つたあらゆる藝術の中で、氏の藝術ほど眞に生命的な、恐ろしい眞實性にふれたものを、他に決して見たことはない。」

恭吉氏の病床生活を通じて、彼の生命を惱ましたものは、その異常なる性慾の發作と、死に面接する絶えまなき恐怖であつた。

就中、その性慾は、ああした病氣に特有な一種の恐ろしい熱病的執拗をもつて、絶えず此の不幸な青年を苦しめたものである。恭吉氏の藝術に接した人は、そのありとあらゆる線が、無氣味にも悉く「性慾の嘆き」を語つて居る事に氣がつくであらう。それからの異常なる線描は、見る人にとつては眞に戰慄すべきものである。

「押へても押へても押へきれない性慾の發作」それはむざむざと彼の若い生命を喰ひつめた惡覺の手であつた。しかも身動きも出來ないやうな重病人にとつて、かうした性慾の發作が何にならうぞ、彼の藝術では、凡ての線が此の「對象の得られない性慾」の悲しみを訴へて居る。そこには氣味の惡いほど深酷な音樂と祈禱とがある。

襲ひくる性慾の發作のまへに、彼はいつも瞳を閉ぢて低く唄つた。

こころよ　こころよ　しづまれ　しのびて　しのびて　しのべよ

何といふ善良な、至純な心根をもつた人であろう。たれかこのいぢらしい感傷の聲なきいて涙を流さずに居られやう。

一方、かうした肉體の苦脳に呪はれながら、一方に彼はまた、眼のあたり死に面接する絶えまなき恐怖に襲はれて居た。彼はどんなに死を恐れて居たか解らない。「とても取り返すことの出來ない生」を取り返さうとして。墓場の下から身を起さうとして無益に焦心する、悲しいたましひのすすりなきのやうなものが、彼の不思議の藝術の一面であつた。そこには深い深い絶望の嗟嘆と、人間の心のどん底からにぢみ出た恐ろしい深酷なセンチメンタリズムとがある。

併し此等のことは、私がここに拙惡な文章で紹介するまでもないことである。見る人が、彼の藝術を見さへすれば、何もかも全感的に解ることである。すべて藝術をみるに、

その形狀や事實の概念を離れて、直接その內部生命であるリズムにまで觸感することの出來る人にとつては、一切の解說や紹介は不要なものにすぎないから。

要するに、田中恭吉氏の藝術は「異常な性慾のなやみ」と「死に面接する恐怖」との感傷的交錯である。

もちろん、私は繪畫の方面では、全く智識のない素人であるから、專門的の立場から觀照的に氏の藝術の優劣を批判することは出來ない。ただ私の限りなく氏を愛敬してその夭折を傷む以所は、勿論、氏の態度や思想や趣味性に私と共鳴する所の多かつたにもよるが、それよりも更に大切なことは、氏の藝術が眞に恐ろしい人間の生命そのものに根ざした絕叫であつたと言ふことである。そしてかうした第一義的の貴重な創作を見ることは、現今の日本に於ては、極めて極めて特異な現象であるといふことである。

萩原朔太郎

目次

竹とその哀傷

地面の底の病氣の顔……三
草の莖……六
竹……八
竹……一〇
すえたる菊……一四
龜……一六

笛……一八
冬……二〇
天上縊死……二二
卵……二四

雲雀料理

感傷の手……二七
山居……二九
苗……三一
殺人事件……三三
盆景……三六

雲雀料理……三八
掌上の種……四〇
天景……四二
焦心……四四

悲しい月夜

かなしい遠景……四九
悲しい月夜……五二
死……五四
危險な散步……五六
酒精中毒者の死……五九

干からびた犯罪……六二
蛙の死……六四
くさつた蛤
内部に居る人が畸形な病人に見える理由……六九
椅子……七三
春夜……七四
ばくてりやの世界……七七
およぐひと……八一
ありあけ……八三
猫……八五

貝……八七
麥畑の一隅にて……八九
陽春……九一
くさつた蛤……九三
春の實體……九六
贈物にそへて……九九

さびしい情慾

愛憐……一〇三
戀を戀する人……一〇六
五月の貴公子……一〇九

白い月……一一一
肖像……一一四
さびしい人格……一一七

見知らぬ犬

見知らぬ犬……一二七
青樹の梢をあふぎて……一三一
蛙よ……一三五
山に登る……一三八
海水旅館……一四〇
孤獨……一四二

白い共同椅子……………………………………一四四
田舎を恐る……………………………………一四六
長詩二篇
雲雀の巣……………………………………一五一
笛……………………………………一六八

挿畫目次

田中恭吉遺作十一種

1 畫稿より　口繪
2 室にさくエーテルの花　中扉
3 冬の夕……二四
4 畫稿より Ⅰ……三二
5 畫稿より Ⅱ……四八
6 畫稿より Ⅲ……七二
7 こもるみのむし（假りに題して）……八〇

8 懈怠……八八
9 死人とあとにのこれるもの……一〇〇
10 悔恨……一二四
11 夜の花
恩地孝四郎版畫三種及圖一種
包紙として
1 抒情(よろこびあふれ)……一七六
2 抒情(よろこびすみ)……附錄の一
3 抒情(ひとりすめば)……附錄の一六
4 われひらく
表紙に用ひて

亞鉛凸版　近松製版所
コロタイプ版　岸本勢助
同印刷　藤本義郎
木版　山岸主計
手摺　小池鐵太郎
機械印刷　五彩閣

大正六年二月十日印刷
大正六年二月十五日發行

定價九十錢

不許複製

著者　東京市外田端一六三　萩原朔太郎

發行人　室生照道

印刷者　東京市芝區新櫻田町十九番地　岡千代彦

發行所　東京市外田端一六三　感情詩社

發行所　東京市外西大久保二四七　白日社出版部
（振替東京二六一六三）

（印刷所　自由活版所）

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03052 1371